

Title	樋口一葉『われから』における装い : 新たな内面描写への挑戦
Author(s)	坂井, 二三絵
Citation	語文. 96 P.44-P.55
Issue Date	2011-06-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/69172
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

樋口一葉『われから』における装い

— 新たな内面描写への挑戦

坂井 二三 絵

はじめに

樋口一葉『われから』(明治二十九年)は、その結末において、富豪の奥方お町が不義の噂のために夫から別居されるが、冒頭で語られる出来事には既にその予兆が示されている。夫不在の深夜、美しい寝巻姿の奥方が若い書生の部屋を訪れるという出来事は、二人の関係に読み手の関心を惹きつけ、この後の展開を期待させる。しかし、この場面に続いて、お町の美しい容貌や日常が語られた後、作品はお町についての話題を離れ、彼女の両親美尾と与四郎の過去へと遡っていく。

両親の過去についての記述は作品全体の三分の一以上を占めており、お町の現在を描く部分とのバランスや接続の悪さが同時代評以来しばしば批判されてきた。だが近年は、二世代の女性が描かれる必然性が重視され、作品の再評価が進んでいる。その嚆矢である蘆植子論⁽¹⁾では、「二つの夫婦の形は、愛が貧困によって裏

切られる形と、愛の不在が富や名譽を無化する跡を対照的にみせ」、美尾には「世のしがらみや掟を破って生きてみたい」という女性の夢を託し、お町には「家族制度下における女性の地位の脆さに触れて、その矛盾を提示」させたとする。以降、戸松泉の「二組の夫婦の破綻への過程を描きながら、妻の〈声〉の行方を追っていった」⁽²⁾、青木一男の「女性の在り方生き方を考え、女性の立場の向上を訴えていた」⁽³⁾など、明治期の抑圧された女性の状況や夫婦の問題、またそこからの解放を描く点⁽⁴⁾が注目されてきた。『われから』の再評価は、フェミニズム分析と共に進んできたということができる。

明治を代表する女性作家「一葉」の作品研究においてフェミニズム分析が重視されるのは尤もだが、一方で、こうした枠組みには集約しきれない問題も作品は当然持っているはずである。本論では、女性作家「一葉」の作品であるという枠組みから一旦離れた。ただし、反フェミニズムの立場を取るのではなく、テキス

ト自体を詳細に見直すことで『われから』の新たな意義を探る。

一 美尾と与四郎のすれ違い―装いの描写に注目して

まず、お町の両親である美尾と与四郎について検討したい。優しい夫との慎ましい生活に充足する主婦であった美尾は、自らの欲望に目覚め、やがて夫と娘を捨てることになる。従来から指摘されているように、美尾の変化のきっかけは、花見で華族の一行を目撃したことである。関礼子は「本モノ」を身につけたいという「模倣への欲望」が、重松恵子は「豊かさへの志向」という物質的な欲望に囚われた人間普遍の心理⁽⁵⁾が、戸松泉は「物質的欲望に囚われ或る種の上昇志向」⁽⁶⁾が、この出来事を契機に美尾に芽生えたと、それぞれ分析している。

美尾の服飾品は「洋銀の指輪」「綿銘仙」「擬ひ南部」「唐縮緬」(四)など、名前からも模倣品とわかるものが多く、華族の「本モノ」の装いと対比されている。この出来事が美尾の変化の引き金として機能していることは各論の通りだろう。だがさらにいえば、美尾が欲するのは「物質」そのものというよりは、それを纏う者の得る世間での立場ではないだろうか。花見の場面で華族を見るのは、美尾だけではない。群衆は皆華族を振り返り、「憎さげな評」や「立派な」(四)という言葉の口にする。こうした華族への嫉妬や羨望の視線は、この場面に先立って描かれる美尾への視線と対照的である。美尾は、「これほどの容貌を埋れ木とは可憐いもの」「惜しい女に服装が悪るい」(四)と美貌と質

素な身なりの落差をからかわれ、粗末な身なりと生活を憂い始めていた。装いは生活レベルの指標として周囲に評されるものだからこそ、美尾の心を揺すぶるのである。

一方、従来与四郎について論じられることは少なく、妻の変化に気付かない夫としての迂闊さや凡庸さが指摘される程度である。本論では、与四郎についても詳しく見たい。例えば、美尾の装いは彼女の变化のきっかけとして機能していたが、与四郎の場合、その通勤姿が「古洋服」と表現されている点が注目される。このような言葉によって等外官与四郎がどのように描かれているのか、時代背景との関係から考えたい。

『われから』は明治二十九年に発表されており、両親の過去として語られるのは、作品内の現在時に二十六歳のお町の出生前後のことである。『われから』に厳密な年代的整合性はないとされるが、「今様ならば襟の間に金ぐさりのちらつくべき」(四)と現在時との違いを明示する語りがなされることから、少なくとも明治初年頃をイメージすべきだろう。しかし、等外官の与四郎が「古洋服」を着ていることは明治初年の時代状況に即していない。例えば、明治十九年発表の坪内逍遙『京わらんべ』では、高等官が「黒羅紗の高帽子」、等外官が「双子唐棧の袴」「半靴もしくは日和下駄」と描き分けられている。また、「二葉亭四迷『浮雲』(明治二十年)では、「白木屋仕込みの果物づくめ」で威張る最上級の官員と安物洋服に満足する中級の官員の様子を嘲笑的に描く一方、最下級を「日本服でも勤められるお手軽なお身の上」とす

る。このように、明治中期頃まで、等外官は日本服が普通で、洋装は中級以上の、立派な官員の印だったのである。

竹内洋によると、明治十年代以降、出自や経済力に関わらず勤勉な学問が成功を導くという「勉強立身熱」が昂揚し、高級官吏はその目標となる職業だった。さらに、明治二十六年には文官任用令により、官員の昇進方法が具体的に示される。明治初年当時の時代状況とはやはり異なるが、美尾が与四郎に「お役処がへり」の「夜学」を勧め、「勉強して下され」(五)と泣いて頼む描写は、勉強すれば昇進し、出世するという立身出世思想の影響を感じさせる。しかし、明治二十八年の『十三夜』で、夜学に励むお関の弟の出世に、お関の夫の力が不可欠なように、この時期になっても、貧しい等外官の出世が現実的には困難なものであったことは想像に難くない。『われから』は、立派な官員の印である洋服に「古」という否定的なニュアンスを付加して与四郎の装いとすることで、近代国家機構に組み込まれつつもその恩恵には与らず、日々軽視される与四郎の立場を強調する。しかも、建前上は出世の平等を謳う立身出世主義によって、出世できない責任は自分自身の無能力と努力不足へと還元されるのである。時代状況に反しても、「古洋服」や立身出世思想を想像させる記述がなされることで、与四郎の苦しい立場が浮かび上がるのである。

「何うで我れは此様な活地なし、馬車は思ひも寄らぬ事、此後辻車ひくやら知れた物で無ければ」(五)という言葉に見られるように、与四郎は稼ぎの悪さや将来性のなさを自覚していて、そ

れが活地のなさし甲斐なさと見なされることも知っている。しかし、曲がりなりにも一定額の月給で生活できることに甘んじているのは、美しい妻との生活に幸福を見出しているからである。妻のために惣菜を買って帰る姿を「したゝれるほど湿っぽき姿と後指さゝれ」、「友には冷評」(三)を聞かされても、与四郎は動じない。一方、「愷気男と付度らるゝも口惜しく」(三)「我が女房を人に取られて知らぬは良人の鼻の下と指さゝれんも口惜しく」(五)と、美尾との関係だけは世間から眩められることが我慢できない。与四郎は希望のない将来や不安定な地位から目をそらし、美しい妻の存在によって幸福とプライドを保っているといえるだろう。

だが、まさにその美尾が、「少しも早く此様な古洋服にお弁当さげる事をやめて、道を行くに人の振かへるほど立派のお人に成つて下され」と与四郎の古洋服の惨めさを指摘する。重松恵子が「一人だけ何もしらずに自己充足している」とする⁹⁾ように、夫としての与四郎を批判的に捉える先行論は多いが、一方で美尾も、等外官の出世の困難さやそのために感じる与四郎の惨めさに気が付かず、彼の最も痛い言葉で責め立てているのである。与四郎が美尾の変化を見逃してしまうのは、美尾の言葉が彼のプライドを傷つけるものであるため、彼女の本心と向き合うことから逃げてしまふためと考えられるだろう。

このように、『われから』における美尾と与四郎の装いは彼らの生活レベルや社会的地位の表象として用いられているが、それ

は単なる貧しさの例示に留まらず、彼らが日常の中で抱えこんでいる痛みを浮き彫りにする機能を果たしている。与四郎は美尾との生活の中に慰めを見出そうとするのに対し、美尾は根本的な生活の変化を求める。この価値観の違いが、それぞれの痛みと二人の距離を増大させ、美尾の出奔と与四郎の転身という大きな展開へとつながっていくのである。

二 美尾の出奔と与四郎の転身

与四郎の出世の可能性が極めて低いのに対し、美尾はその可能性を秘めていることが二人のずれを生み出す要因の一つである。当時貧しい女性にとって、美しさを見初められることは豊かな生活を手にする唯一の可能性であった。だがその裏側には、自ら商品となり、売られていくという悲しみと屈辱が潜んでいる。

美尾の行方は明らかにされないが、出奔時に彼女の残した紙幣は、身売りに近い形で経済的な豊かさを得ただけは仄めかしている。美尾の出奔には母親の関与が考えられるが、娘に先駆けて「従三位の軍人様」のもとへ旅立つ母が「舟路ゆたかに」と期待に充ちた様子で描かれているのとは対照的に、美尾の様子は出奔の直前にも「日々に安からぬ面もち」（七）と語られる。美尾が単純に豊かさを求めたのであれば、出奔後の生活への期待があるはずだが、そうした様子は一切描かれていない。与四郎との生活に幸福を見出せなくなった美尾は、出奔が望ましいものではないと察しながらも、現状を脱したいという思いからも逃れられず、

母に流されるように夫と子を捨てたのではないだろうか。

美尾は当初、「葉師様にて買ふて貰ひし洋銀の指輪を大事らしい白魚のやうな、指にはめ、馬爪のさし櫛も世にある人の本甲ほどには嬉しがりし」と自分に与えられる生活に充足していた。「身分は高からずとも誠ある良人の情心」（四）が、慎ましい生活にも価値を与えていたのである。しかし一度見失った幸せを元のように感じることはできなくなってしまう。美尾を通して描かれるのは、変化しやすい人間のこころとその不可解さといえるだろう。

一方、美尾を失った与四郎の転身は次のように表現されている。

此人始めは大蔵省に月俸八圓頂戴して、兀ちよろけの洋服に毛繻子の洋傘さしかざし、大雨の折にも車の贅はやられぬ身成しを、一念発起して帽子も靴も取つて捨てて（三）

洋服の付属品である帽子や靴を捨てるという言葉で、職を辞すことだけでなく、世間から蔑視される生き方そのものを捨てようとする与四郎の強い衝動が表現されている。与四郎は、等外官の夫との生活を厭い出奔した妻への怒りを、社会において絶対的な力を持つ金への執着に転嫁し、冷酷な高利貸しへと変貌するのである。松原岩五郎の「最暗黒の東京」（明治二十六年）には、月二割の利息で細民相手に貸し付けを行い、彼らを一生返済に縛り付ける高利貸しについての記述が見られる。『たけくらべ』でも、

高利貸しの祖母を持つ正太の「集金に行く中でも通新町や何かに随分可愛想のがあるから、嘸お祖母さんを悪く言ふだろう、夫を考へると己れは涙がこぼれる」という言葉がある。高利貸しとは、社会の弱者を相手とし、恨みを買う生業である。また、お町の住む豪華な屋敷は、「抵当ながれ」(九)と語られている。つまり、与四郎が、零落する敗者から得たことが示唆されているのである。

美尾の出奔が身売りという裏の意味を持つ出世であるように、一代で財をなした与四郎の成功には弱者を虐げる暗さがつきまとう。美尾と与四郎の辿った道は、男女それぞれの空虚な出世といえよう。美尾と与四郎は、日常の中で徐々に変化し、すれ違い、やがて出奔や高利貸しへの転身といった極端な行動に追い込まれる。彼らを動かしたのは、現状を否定し、そこから逃れたいという強い衝動である。結果として二人は金銭的な豊かさをえるが、こうした展開にも拘わらず、夫婦がより悲惨な貧困層には設定されていない点が重要だろう。むしろ、慎ましくも幸せな夫婦として描かれていた。これは、『われから』が貧困からの解放やモノへの欲望ではなく、人の心の変わりやすさ、それゆえの幸せの脆さを描こうとしているためではないだろうか。夫婦両方の痛みを描き、一方を批判するのも、新たな女性像を屹立させるのではなく、誰にも起こりうる問題として提示しているのである。

三 お町の装いに纏わるイメージ

両親の別れの遠因である母の美貌と、結果として残された父の遺産は娘お町に受け継がれ、お町の性格や振る舞いの基になっている。美尾は「島原」の遊女に準えられて動揺したが、お町もその美貌を「新橋」の芸者に喩えられて「いつしか好みも其様」(二)になる。そして、与四郎の遺産がお町の思う通りの派手な生活を可能にしている。では、お町の派手な好みや習慣は、どのようなものとして語られているのだろうか。

第三章、彼女の贅沢な日常生活が説明される箇所、その一例として朝風呂の習慣が挙げられている。「さなご入れたる糠袋にみがき上て出れば更に濃い化粧の白ぎく」(三)と、美貌を保つためのこの習慣は、彼女の派手な好みをよく反映するものだが、語り手は、「夫れ金村の奥様がお目覚めだ」というお町に対する隣近所の冷たい視線にも触れている。また、他の場面では、語り手自身も、「金齒入れたる口元に何う為い、彼う為い、子細らしく数多の奴婢をも使へども」(二)「小棲かた手に友仙の長襦袢下に長く、赤き鼻緒の麻裏を召て、あれよ、これよと仰せらる」(十一)など、多数の使用人を使う様子と、娘気分の抜けない派手な身なりとの落差を捉え、お町の未熟さを強調している。

そもそも、お町は富豪の奥様であるにも拘わらず、その装いは高価なだけでない点に特徴がある。派手好きということに加えて、明治中期の流行品「お高祖頭巾に肩掛け」(二)や、「新調の三枚

着に今歳の流行を知らしめ」(八)と記されるなど、流行に彩られてゐる。美尾の見た華族の着物の「いつ見ても飽かぬは黒出たちに鼈甲のさし物」といった描写とは明らかに異なっている。

同時代においては、派手好みや流行を追う女性ほどのようなイメージで捉えられているのか。小栗風葉『寝白粉』(明治二十九年)では、主人公の派手な姿を描いた後「二十五六の秋も稍深く(略)此年齒にて此扮装、よもや堅気にはあるまじ」と説明される。また、小杉天外『初すがた』(明治三十五年)では「三日男に会はなきや大病人になる」とされる女性が、「三十前後と云ふ年輩であるが、齡には釣合はぬ大柄な紋織御召の二枚小袖に、黒縮緬の長羽織をぞろりと着流し、黄金の指輪の二箇も輝る左手」と描かれている。つまり、この時期の文学作品では、二十代後半を過ぎた女性の派手好みは、玄人風・色好みといったイメージと結びつけられている。また、同時代言説でも「自分の身を飾ることに熱中したり、流行を追ったりする女性」は「他人」(女を批評する男性Ⅱ坂井注)のことばかりを気にして、彼らにのせられ、彼らの気を引こうとする」と批判されていると峯村至津子は指摘する⁽¹⁾。峯村は、美尾像の分析過程でこの指摘をしているが、「流行を追う」という特徴はむしろお町に当てはまる。

以上、お町の装いは、同時代において色好み・自堕落・艶めかしさといったイメージを持っている。スキャンダラスな展開を期待させる作品冒頭の場面も、書生部屋を訪う行為だけでなく、派手さを強調したお町の描写そのものが、不義を犯しそうな雰囲気

を持つのである。別居の決め手となったのは、不義の有無以上にその噂であると指摘されてきた⁽²⁾。主婦らしからぬお町の派手さは、醜聞を好む世間の人々にとって恰好の好奇の的になる。さらに、「自己抑制を怠り、その奥深くに潜んでいるさまざまなる形の欲望に身をまかせた人間を待つのは、つまるところ破滅でしかない」⁽³⁾など、先行論にもお町の行為を批判するものが見られる。読者もまた、こうしたお町の様子に危うさを感じざるをえないのだ。

しかし、今一度朝風呂についての記述に注目したい。主婦としての自覚のなさを象徴するようなこの習慣は、「廃しませうと幾度か思ひつゝ、猶相変わらぬ贅沢の一つ」「一日怠る事あれば終日気持の唯ならず、物足らぬやうな氣に成る」(三)とも語られている。お町の心身の状態を左右するものであり、傍目には輕薄に見える浪費や派手づくりが、彼女自身コントロールしきれない習慣だと説明されているのだ。お町の行為に、世間が考えるような深い意味がないことを示唆する語り手の態度は作品の随所に見られる。「機嫌かひ」とされる使用人への褒美過多も、お町自身に「深くの理由は無き事」と説明し、不義の噂の一因となる千葉への羽織贈与にも「何事も無くて」(八)と付け加えている。

従来は、『われから』の語り手は「女中」たちの『こゑ』と同じ位相にある⁽⁴⁾、さらに「歴然とした階級差が両者(語り手とお町Ⅱ坂井注)の間に常に心理的な距離を介在させ(略)読者とお町の間にも、語り手と同様の待遇意識が反映されて心理的に決定的な距離が生じる」⁽⁵⁾など、お町と距離のある批判的な立場にある

とされている。しかし、逆にお町に代わって釈明をするような言葉も見られることが重要だろう。批判しつつ、擁護もする。このように両面から語ることで、語り手は何を伝えようとしているのか。お町の姿とその内面がどのように語られているのか、冒頭場面から検討しよう。

四 お町についての語り

『われから』は、次のように語り始められる。

霜夜ふけたる枕もとに吹くと無き風つま戸の隙より入りて障子の紙のかさこそと音するも哀れに淋しき旦那様の御留守、寝間の時計の十二を打つまで奥方はいかにするとも睡る事無く(一)

風や時計の音がまず描かれ、暗い部屋で一人静けさに耳をすます奥方の様子が浮かび上がる。しかも、「燈籠台の光かすか」なこの部屋は暗く、部屋を暖める火鉢も「桜炭の半ばは灰に成りて、よくも起さで埋けつるは黒きまゝにて冷え」てしまっている。

作中には、これと類似した描写の見られる場面がある。美尾が突然外泊し、与四郎が一人夜を過ごす箇所である。季節は初春で霜月と異なるものの、「小夜嵐」(三)が吹き込み、「火鉢の火は黒く成りて灰の外に転々と凄まじ」(三)と部屋の寒さを強調する描写は、冒頭場面とよく似ている。「一人淋しく洋燈の光りに

煙草を吸」(三)と与四郎の姿は、「烟管を取上げて一二服」(一)するお町の姿に重なる。「睡る事の無くて幾そ度の寝がへり少しは肝の気味」(一)なお町と、「肝癩のやる瀬なく」(三)な与四郎の妻の仕業かと思ふに余りの事と胸は沸くやう」(三)な与四郎の精神的苦痛が身体に伝わる描写も似通う。いずれも、暗さや寒さが配偶者不在のための孤独や苛立ちを強調している。事情は異なるものの、幸せの根拠を配偶者に置く依存的な心理状態は与四郎とお町に共通する。『われから』では、冷たさや暗さという感覚と寂しさや不信といった心理を、さらに心理と身体的な苦しみを結びつける手法が用いられているといえるだろう。

しかし、お町の場合、彼女とその身辺だけは暗い部屋から浮き上がるように華やかだ。「郡内の蒲団」や「縮緬の搔巻」は贅沢で、「八丈の書生羽織しどけなく引かけ」「腰引ゆへる縮緬の、浅黄」の「引裾なが」いお町の寝衣姿は艶かしい。このようなお町の姿は、深夜に書生部屋を訪うという行為を一層スキャンダラスなものとの印象づけるだろう。重要なのは、お町自身が感知する感覚においては冷たさと暗さを強調してその孤独を描出する語り手が、外側から彼女を描く際には官能的なまでの派手さを強調することだ。ここに、外側から見たお町の贅沢気儘な様子と、彼女の深刻な内面との落差が浮き彫りになる。

こう考えると、しばしばお町の「性」を描いたとされ、危険な展開を予期させるお町の書生部屋訪問にも、別の側面が見えてくる。お町は飼ひ猫玉の鳴き声に気付き、縁側から呼びかけるが、

玉は戻らない。室内よりさらに暗く寒い縁側へ出た上に、愛猫に逃げられることで、お町の身の暗さと冷たさが深まり孤独が際立ってくる。その瞬間、書生部屋の灯に目を捉えられ、導かれるようにお町は書生部屋を訪るのである。この部屋の火鉢の火も消えかけている。部屋の寒さは、親兄弟もなく、ただ一人上京し学問に励む書生千葉の孤独とやはり結びつく。「これは私が蕩楽さ」といって、書生のために火を起こしてやるお町は親切な奥方然として誇らしげだが、相手を喜ばせることで寒々とした彼女自身のことを暖めているように見える。ここで強調されるのは、お町の「性」ではなく、やはり孤独だといえよう。

こうして冒頭から暗示されたお町の心の空隙が表面化するのには、夫恭助の誕生会の夜にお町が庭へ出る場面である。この場面はわずか数行だが、「言うに言はれぬ淋しい心地」をお町自身が自覚する点で重要だ。お町は庭に置かれた社の前に座り、振り返る。

雲間の月のほの明るく、社前の鈴のふりたるさま、紅白の綱ながく垂れて古鏡の光り神さびたるもみゆ、夜あらしきつと喜連格子に音づるれば、人なきに鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。(九)

誕生会で賑わう屋敷内とは対照的に淋しげに揺れる鈴や幣束に、お町の心は惹きつけられる。お町の心を動かすのは、社に宿る魔力であるかのように語られ、論理的には説明されない。「立あが

つて二足三足、母屋の方へ帰らん」とするものの、「引止められるやうに」立ち止まり今度は屋敷の光を見つめ、騒ぎを聞く。

あの声は旦那様、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意気な洒落ものに成り給ひし、油断のならぬと思ふと共に、心細き事堪えがたう成りて、締つけられるやうな苦るしさは、胸の中の何処とも無く沸き出ぬ。(九)

お町の心は、社の寂しい雰囲気と一体化し、屋敷の騒ぎやそこにいる夫の側へ戻っていかない。逆に距離感を実感する。この場面の語り手はお町の外見を描写せず、お町自身が聞くもの、見るもの、感知するものだけを描く。これにより、華やかな生活の裏にあるお町の内面が浮き彫りになるのだ。しかもそれは、お町自身にも説明できない、ただ不安としかいいようのないものとされる。語り手は冒頭からこの場面向けて、外観とは落差のあるお町の空虚な内面を徐々に明らかにしてきたといえるだろう。

五 お町の不安の内実

お町は経済的に何不自由ない生活を送り、夫も政治家として成功している。冒頭場面では浮気がちな夫へのお町の不満が語られている。だが、誕生会の夜に感じた不安は、それを「格気」と笑う夫の言葉を彼女自身が打ち消していることから、単純に夫との関係だけに起因しているとはいえない。また、夫の妾と隠し子の

存在がお町を追い込むことになるものの、それを知る前から不安を感じていることは見逃せない。語り手が「我れと我が身に持て脳みて」(十)と説明し、実態が掴めないために一層お町を苦しめるのは、どのようなものと想定できるだろうか。

お町は、父の思い出を「私をば母親似の面ざし見るに癩の種とて寄せつけも致されず」(九)と語る。娘に妻の面影を見る五四郎は、お町自身を愛することも教育することもなかったと推測される。また、使用人たちも、富豪の娘であり、奥方であるお町を表面上は敬い、陰では非難する。つまり、お町自身と深く関わり、その人間性を評価したり、批判する者はなく、それゆえに本人も信念や生き方を追求せずきたと考えられる。他者と良好な関係を築くにも、美しく着飾り、物を与えるという表面的な方法しかお町は知らない。

文学作品における登場人物の装いは、同時代の習慣や流行を背景に、その人物の職業や経済状況、あるいは人柄や価値観、生き方を読者に伝える機能を果たすことが多い。しかし、『われから』では、お町の纏う流行の品々が、同時代作品のように軽薄さや自堕落さを単純には示していないことを見てきた。流行とは、次々に更新され、その度に新しいものは前のものより洗練されたものとされる。お町の装いが、単に高価なだけでなく、流行のものとして設定されたのは、より敬われ、より愛される自分であろうとするお町の拘りを強調するためではないか。お町が着飾るのは、夫や周囲の者から愛される奥様であり続けようとする潜在的な思いの

表れであり、流行を纏い続けることは、希薄なアイデンティティを保とうとする意識の象徴なのである。朝風呂を「一日怠る事のあれば終日気持の唯ならず、物足らぬやうに氣に成る」(三)のは、彼女の抱え込んだ不安を象徴している。夜の庭でお町が氣付くのは、こうした自己の抛り所のなさと考えられる。

夫の妾と隠し子の存在がお町を追い込むのは、正妻の座を脅かされる不安や嫉妬のためだけでなく、お町の抱えるこの問題に直結するからだ。お町は、使用人同士の噂話からその事実を知る。恭助の妾お浪は、「色の浅黒い面長で、品が好い」「髪の毛慢の櫛巻で、薄化粧のあつさり物、半襟つきの前だれ掛」(十一)と語られる。長谷川時雨が「半襟、前垂れという風俗は、働くといふ堅実な家庭の規則でよほどの物持ち、富家でなければ、前垂れなしでは居なかつた」と記すように、「半襟つきの前だれ掛」は働きものの印である。また、薄化粧と豊かな髪は地味ながらしっかりとした美しさを感じさせ、派手好みのお町と対照的だ。お浪の様子は、幸田露伴『五重塔』に登場するしっかり者の妻お吉の「洗ひ髪をぐるぐると酷く丸め」「烏黒にて艶ある髪(略)浅黒いながら渋気の抜けたる顔」という描写に通じるものがある。使用人に適切な心づけをする聡さが描かれる点でも、お吉とお浪は共通する。お浪は、妾というよりも、夫を支える賢妻の雰囲気なのだ。お浪に、玄人上がりのお吉のような「渋気の抜けたる」という特徴は見られないが、垢抜けていないことは逆に主婦らしい美しさに繋がっている。外見ばかり飾り、夫には甘えるだけのお町

との対照性は明らかだろう。

問題は、お浪が実際にこの通りの女性であるかどうかではなく、賢妻然としたお浪の様子を語るのが、他ならぬお町に仕える使用人たちであることだ。彼らは外見だけでなく、子どもの存在や、使用人への心配りなど、お町との対照性を意図的に語っている。

「旦那も鬼の性」「お気の毒なは此処の奥さま」とお町の肩を持つようだが、浮気を知らないお町も含めた雇い主の裏側を面白おかしく語り合い、仕事の憂さを晴らすのである。隣室で、「明けずらに去ねかし、顔みらるゝ事愁らや」(十二)と息を殺すお町は、身近な使用人たちが自分に向けてきた冷たい視線を痛感している。使用人の噂話から妾の存在を知ったことは、夫に愛される妻と使用人に親切な奥様というお町の自己像を二重に否定してしまう。おぼろげな不安としてお町を捉えていたアイデンティティの希薄さが、現実のものとなったのである。

そう考えれば、癪に苦しむお町が、書生の千葉を呼ぶ理由も見えてくる。千葉は、「御恩のあたゝかく、口に数々のお礼は言はねども、気の弱き男なれば涙さへさしぐまれ」(八)と、お町の親切に感謝する様子が語られていた。妻を軽視して妾を困う夫や、雇い主の陰口をたたく使用人と千葉との決定的な違いは、お町を心から奥様として扱う点だ。だからこそ千葉はお町にとって貴重な存在なのであり、奥様と使用人という関係は保たれていると考えられる。千葉のお町に対する感情で明確に語られるのは先の「御恩」への感謝だけで、彼の恋心は仲働きの福が仄めかしたに

過ぎない。二人の関係も、癪の看病の場面で「人の目にあやく」「乱行あさましきやうに取なせば」(十三)と語られるように、常に他人の視線や言葉が介在している。お町の外観の描写から不義を想起させる冒頭場面の語りは、後半で二人の不義の噂を作り出す、こうした視線を先取りしていたのである。

お町の派手な生活に白い目を向けた世間は、その延長上に書生との不義の物語を紡ぎ出す。その一方で、語り手は、妻として、奥様としてのお町の実態が空虚なものであることを明らかにしていく。お町の内実は、華やかな外見やそこに見出される気儘な奥方像と一致しない上、彼女自身が持つ、夫に愛され使用人に慕われる幸せな奥様像とも決定的に異なっている。お浪の存在が明らかになって以降、語り手は、お町の華やかな外見をもう語らない。そして、冷たさや暗さといったお町の身体感覚に象徴されていたお町の孤独が、癪という、身体の異常として描出されるのである。最後に、お町が別居を宣告される場面を見たい。

(恭助が坂井注) 部やの外へ出給ふを、追ひすがりて袖をとれば、放さぬか不埒者と振切るを、(略) 私は一人もの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、美事すてゝ此家を君の物にし給ふお気か(略) 一念が御座りまするとて、はたと白睨むを、突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ。(十三)

別居を宣告した恭助は、追いつがるお町を振り払う。お町には残酷な仕打ちだが、彼女がそれまでと異なる強い様子で描かれている点に注目したい。世間知らずで育ったお町に、夫と戦う具体的な策があるとは考えにくいのが、逃げるように背を向ける恭助に對して、お町の強い視線は鮮やかだ。お町は、自分を「一人もの」「小さき身」と表現している。誕生会の夜の場面で、やり手の政治家である恭助との生活が自分の「身にそぐなはぬ事」ではないかと感じる不安を語っていたお町が、終局において自分を捨てる夫を批判し、何も持たない無力な自分として夫に迫っている。ただ不安におびえ、庇護者としての夫に縋っているのとは違う。ここにお町の精神的な自立を見ることができよう。お町を通して描かれるのは、性の目覚めや家制度への抵抗といった女の解放ではない。人間が、孤独で不確かな自分自身の内面に向き合っていく過程ではないだろうか。

おわりに

一般に、文学作品では、登場人物の装いがその人物像を示すことがよくある。特に、一葉の時代には、人物が登場すると、まず外見の特徴や装いを詳述し、その人物の職業や経済力を提示するという手法がよく用いられている。また、経済力を誇張した服装が傲慢さや虚栄心を描出したたり、女性の登場人物の場合は、華やかさや性的な魅力の演出となったりすることもある。だが、この時期、装いの描写は類型的なイメージで用いられ、その範囲内で

の人物説明に留まることがほとんどである。一葉の作品においても、当然こうした手法が用いられている。本論で論じたように、美尾と与四郎の場合は、装いの描写の持つ類型性を活かして、それぞれの内面の痛みと夫婦のすれ違いを描き出した。

しかし、一葉はしばしば、個々の着物や装飾品の持つ世間一般的なイメージを前提としつつ、そのイメージから乖離した登場人物の内面を描き出そうとしている。『たけくらべ』では、終盤美登利が変化する場面で、大島田に結び上げた美登利の美しい姿が描かれる。その美しい姿を美登利は「嫌やでならない」と憂い、美しさに振かえる人の視線も、嘲りや蔑みと感じてしまう。また、『十三夜』のお関は、「大丸鬚に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく」と立派な姿で実家へ帰ってくるが、実際には夫から精神的虐待といえる扱いを受け、その内面は苦しみに充ちている。だが、父や録之助は立派な装いばかり目を向け、彼女の深刻な苦しみへと理解が辿り着かない。これらの作品では、装いの持つイメージが他者からの理解を妨げることで、そのイメージとは裏腹な登場人物の心理が逆に強調される。

『われから』では、このような手法がさらに複雑化している。美尾と与四郎の場合、装いの一般的なイメージが彼らの経済事情や社会的立場と一致していたが、お町の場合はそれほど単純ではない。お町の装いは、彼女の内実とは異なるイメージを世間と与え、彼女を醜聞に曝し孤立させるといふ展開を導く。そればかりではない。着飾ることで不安やアイデンティティの希薄さを誤魔

化そうとするお町の潜在的な心の動きが描かれ、作品の進行とともに華やかな装いに託して作り上げたお町の自己イメージが幻想にすぎないことが明らかにされていく。『われから』が描こうとしたのは、幸せというものを、そして自己というものの曖昧さや複雑さではないだろうか。

美尾と与四郎において、幸せや自己を見失った不安や怒りが、富という最も明確な形をもつものへの志向へと転嫁される過程が描かれていた。だが、お町においては、その不安や孤独と向き合っていく過程を描き、より深くその内面にせまっている。装いは、両親とお町の心の動きを対比し、その内面をより深く、濃やかに描き出すために、十分な配慮と意図を持って用いられている。一般には類型的描写に留まりがちな装いの描写を通して、この作品の大きなテーマが浮かび上がってくる。こうした手法の洗練にも、一葉最後の作品『われから』の新たな描写への挑戦の姿勢を見出すことができるのである。

注

- (1) 『透谷・藤村・一葉』所収『われから』論（明治書院、一九九一）。
- (2) 『われから』試論（『解釈と鑑賞』一九九五・五）。
- (3) 『われから』——人妻物語への試み（『解釈と鑑賞』二〇〇三・五）。
- (4) 『物語としての『われから』』（『立教大学日本文学』一九八六・十一）。

(5) 「樋口一葉『われから』論——母娘の物語が指向するもの——」『近代文学論集』（一九九二・八）。

(6) 注2前掲論。

(7) 後藤積「商人としての樋口一葉」（千秋社、一九八七）で、詳しく検証されている。

(8) 『立志・苦学・出世 受験生の社会史』（講談社現代新書、一九九一）。

(9) 注5前掲論。

(10) 『家庭雑誌』72号（明治二十八年）に、「婦人外出の時には頭巾と肩掛を着用せざれば世間に慚色あるか如き」とある。

(11) 『一葉文学の研究』（岩波書店、二〇〇六）。

(12) 注1前掲論。

(13) 大井田義彰「罪は我が心より……『われから』試論」（『媒』一九八八・十二）。

(14) 小森陽一「囚われた言葉／さまよい出す言葉」（『文学』一九八六・八）。

(15) 注5前掲論文。

(16) 注1前掲論など。

(17) 『随筆・きもの』（実業之日本社、一九三九）。

付記 引用は、『樋口一葉全集』第一・二巻（筑摩書房、一九七四）を用い、旧字は適宜新字に改めた。傍線は、稿者による。

（さかい・ふみえ 本学大学院博士後期課程修了）